● 読書感想文コンクール 小学校 4･5･6 学年 の部●

市長賞

中山　太洋（なかやま　たいよう） 大和田小 ６年生

作品名：戦争の事実を知った夏
図　書：ガラスのうさぎ

「わたしが死んだら、お父さん、お母さん、信ちゃん、光ちゃんのお墓参りは、だれがするのか。わたしは、どんなことがあっても生きなければ、がんばらなくては！」

この言葉は、東京大空襲で母と二人の妹を失い、機銃掃射により目の前で父が亡くなったという、すさまじい体験をした一人の少女が心で誓った言葉である。その少女の名は、敏子。僕と同じ小学六年生の十二歳だ。

この本は、戦争の中を生きぬいた敏子さんが、少女時代の体験をつづったノンフィクションである。一九四五年三月十日。東京は米軍機 B29 約三百機による爆撃で十万人という多くのいのちが失われた。敏子も母と二人の妹を失う。焼け跡には、敏子の家にあったガラスのうさぎが、ぐにゃぐにゃになり変わり果てた姿で転がっていた。どんなに激しい炎が、街中を飲み込み、燃え尽くしていったのだろうか。敏子は、母と二人の妹が死んでしまったと信じたくなかった。母はいつも「死んでたまるものですか。」と言っていたからだ。

八月五日、敏子は父と一緒に、疎開先の神奈川県二宮駅で列車を待っていたところ、P51 戦闘機の機銃掃射で、あっという間に父を殺されてしまった。父の頭や体に銃弾が当たり、血がだらだらと流れていた。「お父さん！お父さん！」と何度も何度もさけんだが、父はぴくりとも動かなかった。僕はこの場面で、恐ろしさと、あまりにも残酷な亡くなり方に、目をつぶりたくなった。これ以上、本を読み続けることがつらいと思った。もし僕が、敏子と同じ目にあっていたら、どうしただろうか。目の前で父が殺されてしまうなんて、想像するだけで心臓がバクバクと音を立てて、引きちぎられてしまうくらい、痛く悲しい気持ちになった。そんな中でも、敏子は涙をこらえて、父を火葬するために役所に行ったり、薪を集めたり必死に走り回った。本当は、つらくてつらくてたまらなかったはずなのに。「だれに、この怒り、この悲しみ、この悔しさをぶつければよいのか。」しかし、敏子は、「いつまで

も泣いていたのでは、みんなが心配してしまう。泣くのはよそう。」と決心し、涙をこぶしでぎゅっとぬぐい、精一杯生きていこうとする。僕に同じことができるだろうか。敏子のように、心を強く持てるだろうか。敏子を強くしたものは、何だったのだろう。「戦争って、人と人との殺し合いではないか。」という、戦争への怒りの気持ちと、「戦争という困難に負けてたまるか！」という気持ちが、敏子の心を強くしたのではないだろうか。

僕は、戦争の事実を知りたくなり、夏休みに、「八王子に戦跡を探す旅」というバスツアーに参加した。僕の住む八王子市も、かつて市内の大半が被災したそうだ。僕が一番ショックを受けた戦跡は、湯(い)の花トンネルだ。昭和二十年八月五日、中央本線の湯の花トンネルで、Ｐ５１戦闘機が列車に対してしつこい機銃掃射を加え、多数の死傷者を出した。車内は血の海で、まさに地獄だったと聞いた。僕は、トンネルを見つめ想像したら、胸が締めつけられる思いだった。と同時に、ドキッとした。そのＰ５１こそ、二宮駅で敏子の父を撃った戦闘機だったと知ったからだ。

現在、社会の教科書には、目をつぶりたくなるような悲惨な事実は載っていない。しかし、この本は教えてくれた。戦争の無惨さや虚しさを。そして僕たちは、目をつぶらずに学ばなければならない。戦争は、尊い生命を、大切な人を失い、悲しみしか残らないことを。

戦後七十年とは、日本が七十年間、戦争をしなかったから言えることだ。それは素晴らしいことであるが、これから先、戦後と言えるようにするには、過去を見つめる機会を、つくり続けるしかない。平和は、当たり前ではないのだから。